前進
週刊
発行所 前進社
編集・発行人 田上 伸
本社 豊島区東池袋2−62−9 電話(03)984−8651(代) 振替 東京 88857
関西支社 大阪市北区中崎町161 電話(06)371−7558 振替 大阪 16016
号外 1部 20円
通常号6頁50円 月ぎめ 200円
郵送読者の購読料 1部半年1500円・1年3000円 2部半年3000円・1年6000円 3部以上は送料当方負担

七〇年代死闘の突破口

六月安保決戦に総決起せよ

大衆的戦闘的爆発かちとり革命的展望を人民のものに

反帝国主義・反スターリン主義の旗のもと
万国の労働者団結せよ！
革命的共産主義者同盟
全国委員会

6・14（代々木公園）に大結集し、15からの連続的激闘へ

6・14 労学市民 大統一行動
14日正午・代々木公園結集
全国反戦、全国全共闘、六月行動委

七〇年六月――ついに六月決戦の時が到来した。たしかに現実の階級闘争の激烈な展開は、決してスケジュール闘争的には進展しない。われわれはすでに六九年十一月を「七〇年闘争」の天王山として、すなわち、これこそ安保決戦だとして全力を投入して闘いぬいた。そうしてわれわれはその十一月決戦の勝利的貫徹をなしとげた。十一月決戦の勝利的貫徹は実に偉大な時代をきりひらいた。すなわち侵略につき進む帝国主義に対して、城内平和の未確立な状況の下で、「侵略を内乱へ」と転化するために闘うという時代がきりひらかれたのである。内乱的死闘の時代としての七〇年代の幕がきって落されたのである。かくして、七〇年六月をめぐる闘いは、きりひらかれた新たな時代の最初の大がかりな対決点としてやはり一個の決戦的性格をもつものとして鮮明にみずからの姿を階級闘争の戦場にうきぼりにしてきたのである。七〇年六月をめぐる内外の諸情勢の歴史的性格が、さらにまた十一月決戦の勝利的貫徹そのものが不可避的に規定する階級闘争の論理が七〇年六月の闘いを否が応でもすさまじい死闘的な性格のものとして必然的におし出してきているのである。帝国主義がますます危機を深め、いよいよ深く絶望的なアジアへの侵略戦争にひき込まれつつあるとき、武装した人民の力で帝国主義を倒すことこそ、プロレタリアートの歴史的使命である、と実践的に宣言したのが十一月決戦であるが、この十一月決戦をへた今日、この十一月決戦のかちとった高地をテコとして七〇年代の革命的展望を、全人民的に確立し、社共にかわる革命党の建設を一挙的におし進める闘いとしての六月闘争それ自体が、七〇年代の成否をかけた階級的決戦としての性格を不可避とするのである。

帝国主義権力は何が何んでもこの六月闘争を挫折させ、七〇年代の反革命的展望をかちとろうとしているし、逆にわれわれは、是が非でもこれを打ち破り、闘いを大衆的戦闘的に爆発させ七〇年代の革命的展望を全人民的に定着させ党的に集約しきっていかねばならない。これは十一月決戦とは形態は必ずしも同じではないが、やはり決戦であり、死闘であり、断じて敗北しえぬ闘いなのである。このような闘いとしての六月決戦はすでに開始された。全力を投入して勝利せよ！

一、六月決戦の時代的背景

六月闘争を一個の重大な決戦たらしめる第一の要因はいうまでもなく、この七〇年代という時代そのものの性格のなかにあるのである。七〇年代とは、帝国主義の危機と侵略と反動の時代である。われわれが六六年革共同三回大会以来明確に規定してきた、戦後世界体制の根底的動揺と日本帝国主義の危機の深化ということが、いよいよもって現実化しドラスティックな展開をみせてくる時代なのである。アメリカ帝国主義の体制危機を基軸とし牽引車として世界史は三〇年代的危機へとラセン的に回帰しつつある。スターリン主義は迫りくる革命を革命の名において裏切る反革命的性格をますます露骨なものとしており、階級闘争の危機の中で、帝国主義は侵略と反動の時代へところげおちていこうとしているのである。日本帝国主義は断じてこの例外ではない。むしろ最も強くこの激動の中に破局的に突入せざるをえない運命にあることは確実なのである。日帝の直面しつつある危機については おそるべき過小評価が戦後の「相対的安定」の痴呆的感覚の延長線上に存在している。今日の日帝の「繁栄」と「安定」などその外見上のたしかさにかかわらず、実にははかないものでしかないのである。すなわち、一方ではそれは今日進展しつつあるアメリカの体制危機の発展いかんでは、経済的にも政治＝軍事的＝体制的にも一挙にくずれおちざるをえないものであることは明々白々であるし、他方ではまた経済の肥大症的膨脹は、帝国主義列強間の経済交易で若干でも齟齬を来せば、たちまちにして大混乱におちいり、結局のところ、アジアに独自の勢力圏を構築するために再植民地化のための大々的侵略に突入する以外に道はないのである。だからこそ日帝は一種異様な形相をもって国内階級戦の激化を抑えつつ、アジア侵略への道を体制的重みをかけてつき進みつつあるのである。こうしたわれわれの展望を危機意識過剰とかパラノイヤとかいいたければいえ！しかしだれが歴史の根幹の動向をつかんでいるかはすぐにわかることなのである。

さて、このような日帝をめぐる内外の歴史的情勢の進展のなかで日帝はその逢着する諸矛盾の激化から脱出するために、アジア侵略への道を選択し、それをいわば基軸政策「国家目標」としてきていることはすでにくりかえしくりかえし明らかにされてきたことだ。

日帝はアジア侵略への道を今日的に、そして七〇年代的に、次のような方向で推し進めんとしているのである。すなわち、アメリカ帝国主義のアジア侵略の絶望的拡大と危機の深まりに対処して、米帝と結託してのアジア侵略政策を最大限今日的に現実化していくことを突破口としつつ、他方では「沖縄返還政策」のペテン的適用をテコとしての予防反革命即アジア侵略戦争体制構築の攻撃をかけ一挙的体制的に情勢の転回を図らんとしているのである。七〇年＝七二年の政治過程を跳躍台として極東最大のアジア侵略基地としての沖縄を再編、固定化しつつ日本に「包摂」することによって、アジア侵略への決定的エスカレートをなしとげ、そのうえにたって日帝軍隊たる自衛隊そのもののアジア直接侵略への道をはききよめようとしているのである。七〇年六月闘争はすでに開始されたこうした攻撃との激突としてあるのであり、闘いの性格の決定的きびしさは当然であるといわざるをえないのである。

二、われわれの70年代総路線が六月闘争の内容を規定する

[illegible]……時代に際会し……革命と内乱の総路線をもって対決せんとしているわれわれ自身の七〇年代総路線の革命性そのものである。

われわれの総路線とは、周知のように「日帝のアジア侵略を内乱へ転化せよ」あるいは「沖縄奪還、安保粉砕・日帝打倒」【この二つの視角から捉えたものであり、本質的に一体のものである】の基本路線の下に、一方では「米帝と結託しての日帝のカンボジア＝ベトナム＝アジア侵略粉砕！」「日米軍事基地撤去」などのスローガンの下に現実的今日的に進行するアジア侵略と対決しつつ、他方では「基地と侵略のためのペテン的反人民的な『七二年返還』政策粉砕！人民の力で沖縄奪還＝本土復帰・基地撤去、永久核基地化粉砕をかちとれ！」「沖縄の永久侵略基地化ねらう反人民的な『沖縄返還協定』交渉を粉砕せよ！」「ただちに基地・核・毒ガス・B52撤去せよ！」などのスローガンの下に、「沖縄」を逆用しての侵略体制づくりの攻撃に対決して、全人民的決起をかちとっていくこと以外ではありえないのである。（七〇年代前半のわれわれの安保＝沖縄闘争のスローガンの詳細は別項を参照されたい）。

詳論するまでもなく、この諸スローガンをみれば明白なように、階級闘争の今日的激化はすでにわれわれに、革命的戦略、革命への過渡的要求、内乱のよびかけを発することを迫ってきているのであり、それ以外にいかなる立場もありえなくしてきているのである。ここに六月闘争が決戦化せざるをえないいまひとつの背景があるのである。

三、内乱的死闘の時代はすでに始っている

A 七〇年代死闘の一環としての六月闘争

六月闘争を一個の決戦たらしめる第三の要因は、第一、第二の要因の解明からおのずと明らかとなることだが、七〇年代の内乱的死闘にむけて六月闘争があるのではなく、すでに内乱的死闘の時代が開始されており、**その重大な一局面として**七〇年六月の結節点が存在しているということである。すなわち、内乱的死闘の時代の階級闘争の原理がすでに生々と働いているのであり、〝六月〟に誰が勝つかはそれ自体血みどろの争いとなってきているのだということである。

したがって以下われわれは、内乱的死闘の時代の階級闘争の原理とは何か？について日本階級闘争に即しつつ考察し、それによって六月決戦の内容をより具体的に把みとっていきたいと考える。

B 敵の絶滅が不可欠の時代

まずなによりも内乱的死闘の時代の階級闘争とは、革命か反革命かの極めて「硬直した」二者択一が不可避となること、そして、この両者の両極的対立は、文字通り一方が他方を打倒しきるまでもはや止むことがないということである。つまり相互に相手の絶滅、打倒を追求する以外に生きられない死闘的展開が不可避となるということである。

なぜか？ それは帝国主義の危機が侵略戦争と暗黒反動支配をさけられないものとすることそのものによってそうなる以外にないのだ。具体的に考えてみよ。こんにち日米帝国主義者にとってアジア侵略戦争の成否に体制そのものの成否がかけられており、絶対に負けられないものとしてあるということだ。今日のアメリカの事態がはっきりと示しているように、第一次、第二次大戦のように帝国主義列強間ブロックの直接の大戦とはなっていない戦争、直接には戦後の帝国主義の後進国・半植民地支配体制をかけての「植民地戦争」の永続的展開でしかない戦争であっても、第二次大戦後の世界史的諸条件特質の下では、帝国主義のすべてをかけた総力戦とならざるをえないのである。

だからましてや二流帝国主義でしかない日帝のアジア侵略は、狂気じみた冒険的政策であるとともに、超総力戦化せざるをえないのは必至なのである。

したがって、日本帝国主義者はこうしたアジア侵略の時代への突入にあたっては、一つには露骨に帝国主義軍隊の確立を軸にして総力戦体制をつくりあげ、膨大かつ強力な戦力、軍事力を形成することに狂奔せざるをえないのでありさらにいまひとつには国民の政治的、イデオロギー的、軍事的結集いわゆる総動員体制の構築に血道をあげる他はないのである。帝国主義は生きるために死活をかけてこの方向に突進していく必然性にあるのである。

【帝国主義者をして総動員体制の形成へとかりたてるのは、単に当面の戦争の遂行のためという理由からだけではない。二十世紀の諸経験は、〝事態の窮極には帝国主義の如何ともしがたい末期的な危機があり、侵略戦争はその絶望的脱出のための努力なのだが、それは実際には危機の破局的拡大しかもたらさずプロレタリア革命への内乱的諸契機をいたるところに、勢いよく成長させてしまうものであり、敗北時はもとより、敗勢の進展というだけでも「戦後革命」的危機を生起させてしまうものである〟ということを、いやというほど支配階級に教えているため、権力者達は戦争体制への突入過程自体において、すさまじい政治的、イデオロギー的、暴力的攻撃をつよめ、総動員体制の構築に命がけの努力をつよめるのである】

C 激動期の階級闘争の諸相

では、日帝によるアジア侵略体制構築のための国民的総動員体制への途上における階級闘争の展開はどういう内容をもたざるをえないであろうか。

第一にわれわれは、日本帝国主義国家権力と革命党（革命運動）との死闘が不可避であるということをがっちり確認しなければならないであろう。帝国主義ブルジョアジーにとって侵略に反対し侵略を内乱に転化することを唱える革命的勢力の絶滅が絶対命令となることはいまさら説明するまでもなかろう。すなわち、革命党（運動）が大衆のなかに根をおろして存在しつづけること、場合によっては大衆のなかに充分根をはっていないけれどもともかく存在しつづけること――これだけで支配者ともにとっては危険であり、恐怖の原因となるのだ。戦争体制が妨害されるだけでなく、一たん情勢が急転しはじめ、大衆の流動の局面が生起しはじめるやこのようなおそるべき過激派が一挙的に大衆のなかに勢力を形成し、体制を根底から脅かすものに発展する可能性がきわめてつよいからなのである。だから、今日の段階ですでに支配階級国家権力がわれわれに対して破防法攻撃を形式的にも実質的にもかけ、本多、秋山同志らの最高指導部を奪いとり、数千数百の英雄的同志達を牢獄にたたきこんできているのは決して気まぐれではないのだ。彼らはわれわれの絶滅、転向を基本的には迫ってきているのである。つまり死闘は街頭や職場だけでなく、牢獄のなかでも最も熾烈に闘われているのである。

第二にわれわれは社共既成指導部の転向と変容について注目しなければならない。

帝国主義の危機と侵略戦争と反動の急転回という情勢の下では体制そのものの危機の存在に規定されて、社民的運動はその社民的「反帝国主義」政治が体制打倒か体制擁護かの二者択一のきびしさに直面してくずれ去り没落しはじめるとともに、労働組合の体制内化、体制協力派化＝いわゆる帝国主義的労働運動への右翼的再編をテコにして、議会主義、民主主義平和革命論の名の下に、プロレタリア革命、暴力革命に対して、反「革命」化、反「暴力革命」化を急テンポでおしすすめるに至るのである。帝国主義はそれを促進しつつ、一朝有事の際の自己の安全弁としてかかえこみ、利用せんとするのである。（帝国主義の危機の深さが、延命のためにはどんな手段をもとらざるをえなくするのである。）

すでに、現段階において、日本で、一方で社会党の崩壊的危機の進展として、他方で労働組合運動の右翼的大再編のヘゲモニー争いとしてこれらのことは音をたててすすんでいるのだ。スターリニスト・日本共産党は、帝国主義の危機と侵略にプロレタリア革命を対置するのではなく、平和、民主、独立、中立、繁栄などというスターリニズムにもとづく小ブル的反動的総路線をおしすすめるのであるが、権力は「でも革命派」として徹底的においうち的攻撃をかけつづけるのであり、スターリニストは弁明のなかで、ますます社民化と社会帝国主義化をつよめるのである。しかしそれは決して〝休戦〟をもたらしきるものではなく危機にたつ帝国主義は巨大化するスターリン主義を利用しつつも、おいつめていくのであるが、スターリニストはこれに対して革命をかかげて闘うのではなく逆に反スターリン主義＝革命的共産主義運動に対する「反トロツキスト策動」を徹底的につよめ「唯一の前衛」としての神話を脅かすものに向けて絶滅のための襲撃をくりかえしてくるのである。

かくして、社民は帝国主義の労働代官、労働伍長、労働警察としての役割をつよめ、労働組合運動の〝帝国主義化〟をすすめるとともに、わが革命的左翼、反戦派に対しては、大衆との結合を断ちきり、大衆のなかに根をおろしつつあるものをあばきたて、資本と権力にうりわたす攻撃をかけて、生きのころうとして懸命となり、スターリニストの反スターリン主義＝革命的左翼に対する攻撃はすでに法政大で、東大で行われ、杉並で行われたようにきわめて尖鋭なドラスティックなものに発展せざるをえないのである。その闘いは帝国主義権力と革命党（運動）との激突と区別と連関で把えねばならないが、われわれにとってスターリン主義との死闘は文字通り帝国主義との死闘の運命を決する性格をもってくることを肝に銘じておかねばならないのである。

第三にわれわれはこのすでにはじまった内乱的死闘の時代の階級闘争は不可避的に極右的運動（組織）の問題を登場させることに注目しなければならない。体制の絶望的危機と革命的激動の時代、革命の挫折のくりかえしのなかで革命に絶望した小ブルジョアを基礎とするファシズム的諸運動、あるいは軍隊や警察官僚体制の異常な肥大化のなかで進展する警察的軍事的国家化の形態によって人民を監獄的支配体制におさえつけるボナパルチズムの諸形態。いずれにせよ歴史的激動の深化のなかで登場してくることは必然的でありすでに今日の日本では国家のボナパルチズム的形態への転換が進展しつつあるのである。

しかもこうした事態の発展は、当初はいずれも大して重大でないような事象として姿をあらわし、一定の情況下で一気におどり出てくるものである。したがって、われわれは極右的小グループの反革命白色テロルの動きを決して軽視してはならないのである。われわれは、革命的統一戦線の下に、これらの動きの一つひとつの危険を政治的、イデオロギー的にも、そして暴力的軍事的にも粉砕しきっていかねばならない。これは決して未来の予測の問題ではない。すでに三里塚では、白色テロルの攻撃はわが同志、闘う農民の血を流しているし、警察的攻撃の口実をつくりだしているのである。この意味でも、七〇年代の内乱的死闘はすでに現実のものとなってきているのである。

第四に、われわれは、この内乱的死闘の時代の階級闘争の展開過程においては、いままでの第一、第二、第三の死闘とは性質、次元を一応異にするが、しかしそれらと決して万里の長城で区別されているものでもないいまひとつの死闘の時代であることについて厳しく確認しておかねばならない。それは、今日の日本の革命的左翼が少年的段階から成長し青年となり成人となっていく過程で不可避となる、革命的左翼のきびしさからの思想的、政治的、組織的脱落と敵への屈服と裏切り、との闘いつまり党派闘争の問題である。とくに一方における革マル的な反スターリン主義運動からの脱落と妨害物への転落のあくどい進展、他方における統一戦線内部で今日急ピッチですすみつつある毛沢東主義への右翼的屈服を水路とする反「反スタ」化＝スターリン主義への逆流という情勢は敵との闘いにおける具体的な統一行動・統一戦線の確保、適用と党派闘争の激烈な遂行との統一を正しく遂行することをわれわれに迫ってきているものである。

激烈な党派闘争（内ゲバを含む）を本来的でない事態などと考えるのは全くの小ブル的幻想なのだということ、このことの革命的遂行をも承認するのでなければ決して共産主義者とはいえないのである。こうした意味でも六月闘争は決定的な内容をもってきていることはすでに明らかになっている。われわれは六月をとおして、他を圧倒して完全に一頭地抜きんでなければならない。

四、危機は好機だ！革命的左翼への反革命十字砲火を圧倒的発展の狼火とせよ！

六月闘争を一個の重大な決戦たらしめずにはおかない基底的諸条件は次第にあきらかとなってきたと考えるが、つぎにわれわれは、開始された内乱的死闘の時代の階級闘争の死闘的性格から必然化するところの危機＝好機の諸関係を明らかにし、六月闘争の革命的発展をおさえつけるための反動的十字砲火に屈することなく逆に圧倒的大衆の戦闘的昂揚をそこからひきだしかちとっていかなくてはならないのである。

すなわち、いままで述べてきたような、すでにはじまった階級闘争の死闘的激化とくに敵の攻撃の激化は、われわれにとって決して単なるピンチではないのである。むしろ逆なのだ。情勢の土台は帝国主義が危機にはまりこみ、革命によって打倒される以外に出口がなくなってきているとき、「侵略を内乱へ」「日帝打倒＝プロレタリア革命」の旗を真向からかかげてわが同盟を中軸とする反スターリン主義＝革命的左翼が成長し、階級闘争の内乱的発展を主導しぬき、それを革命へと集約せんとして大胆不敵の闘いをおしすすめているという点にあるのである。これこそ、権力や、社民、スターリニスト、右翼、あるいは革マル派などが、それぞれの内容と形式をもってわれわれに対してなにがなんでも粉砕せんとして迫ってくる根拠なのである。

別のいいかたをすれば「侵略を内乱へ」『沖縄奪還、安保粉砕・日帝打倒』という思想と政治戦略、方針以外いかなる思想も決してプロレタリアートの心臓を真につかむことはできないのである。われわれの思想と路線こそ、プロレタリアートが自己解放にむけての闘いで生死しうる唯一のそれなのである。

「侵略を内乱へ」というわれわれの立場、革命的敗北主義の立場以外にこの帝国主義の体制危機の時代の「国のため」「国が生きるため」という国益論、生命線論、祖国防衛論などの超反動的な帝国主義的排外主義と愛国主義の洪水に耐えられる考え方はないのである。この点でのいかなるアイマイさも敵への屈服となる。このギリギリの階級対立の時代にプロレタリアートの思想の厳格な貫徹は巨大な力を逆に発揮するものとなるのである。

われわれに反動的十字砲火をあびせるすべてのものはこのわれわれのきびしい思想と路線、根性、気迫、忍耐心、熱気の強さに実はおびえているのである。われわれは権力のいかなる弾圧にも屈せず社共のいかなる圧迫と排除と裏切りにも屈せず革マル派＝反革命武装集団のいかなる策動にも屈せずプロレタリアート大衆、人民大衆のなかに広く深く入りこみ宣伝煽動し組織し巨大な運動体を創成していかねばならないのである。

とくに労働運動の右翼的再編の大逆流はきわめてきびしいが、逆にそれが、われわれにとって社共にかわる革命党への成長のために大衆とがっちりと結合し根をはっていく以外に生きられないことを[illegible]

（二面につづく）

一九七〇年 故樺美智子追悼墓前祭
主催 墓前祭実行委員会
日時 六月十五日午後五時半
会場 よしの家支店（電話 〇四二三―八一―一六一五）国鉄中央線武蔵小金井駅北口からバスで多磨霊園裏口下車

6月闘争の政治スローガン

■日帝のアジア侵略を内乱へ転化せよ！ 沖縄奪還、安保粉砕・日帝打倒！
■アジア侵略への道＝日米共同声明体制・安保新体制を粉砕せよ！
○米帝と結託した日帝のカンボジア、ベトナム、アジア侵略粉砕！
○沖縄・本土の全侵略拠点粉砕！ 米軍基地・自衛隊基地を撤去せよ！ 沖縄からのアジア侵略をすぐやめよ！
○アジア侵略と内乱鎮圧のための自衛隊増強反対！ 侵略と抑圧のための自衛隊沖縄派兵絶対阻止！ 米軍基地の自衛隊移管反対！ 第三次砂川闘争を先頭に全国基地闘争を爆発させよ！ 自衛隊を革命的に解体し、全人民の武装のため闘いを発展させよ！
■ペテン的反人民的「七二年返還」政策粉砕！ 全人民の力で沖縄奪還＝本土復帰・基地撤去、永久核基地化粉砕かちとれ！
■基地と侵略のために人民を踏みにじる日米帝の「七二年沖縄返還協定」交渉を粉砕せよ！
○「核ぬき、本土なみ」のペテンを絶対に許すな！
○基地の安全維持のための人民の生活と権利の破壊を許すな！
○基地維持のための治安体制強化粉砕！
○日米協議委員会、現地準備委員会を粉砕せよ！
■沖縄基地の再編強化＝アジア最大の米軍兵たん基地化反対！
■返還準備に名をかりた反人民的諸攻撃を拒否し、粉砕せよ！
○全軍労の不当解雇絶対反対！
○教育制度の反動的一体化反対！
○教職員会への攻撃に全力で反撃しよう！
○警察、治安体制の圧倒的強化を許すな！
○返還に名をかりて人民の生活と権利を踏みにじるな！
■沖縄の差別と分断の再編固定化を絶対に許すな！
■ただちに核をとりはらえ！ ただちにB52は出ていけ！ ただちに毒ガス兵器を含むいっさいの化学兵器を撤廃せよ！ ただちに渡航制限を撤廃せよ！ ただちに米軍は出ていけ！
■アジア侵略政策の一環＝入管体制・入管法を断固粉砕せよ！ 日帝の抑圧と闘う在[illegible]
■日帝の朝鮮再侵略＝再植民地化の攻撃と闘い、朝鮮人民の反日（帝）闘争と連帯せよ！ 朝鮮人高校生への暴行を許すな！
■アジア侵略のため、闘う農民を踏みにじる三里塚空港建設強行絶対粉砕！
■公害を許すな！ 公害根源を実力で撤去せよ！
■十一月決戦裁判に対する東京地裁の暴挙を粉砕せよ！ 破防法体制粉砕！ 秋山前全学連委員長をはじめとする全ての同志を獄中から奪還せよ！

6・15全都全国から国会南通へ

大衆的戦闘的爆発かちとり革命的展望を人民のものに

（一面からつづく）

五、激闘のなかで党を建設し、党をテコにより巨大な戦闘へ

六、六月決戦は是非とも勝たねばならない決戦である

東大安田講堂前大結集をかちとれ

12時～2時安田講堂前集会→3時～5時駒場集会→国会南通用門へデモ→日比谷野音→銀座デモ

安保粉砕総力戦

21日 労働者デモの先頭へ

22日 夜国鉄スト支援闘争

東京代々木公園に結集

23日 政治スト貫徹総力戦

全国各地で連続的波状闘争

会挙 自治選

京大教養で圧勝

民青執行部をリコール

東北大教養、静大教養、九大理

岡大農、群大教育で民青打倒

東京

▽6・18 東京都学生自治会連絡会主催 6時／王子駅前集会／東京都庁、北部病院、会場

▽6・19 南部学生自治会連合 6時／荏原中延駅／大久保

▽6・19 全学連都内地区集会 6時／新宿駅前／大久保

▽6・20 中央学生自治会連合 6時／新宿西口駅前

千葉

▽6・20 千葉県学生自治会連合 6時／新宿西口駅前

神奈川

▽6・18 全神奈川学生自治会連合 6時／王子駅前集会

▽6・19 全神奈川学生自治会連合 6時／横浜駅前

群馬

▽6・19 全都学生自治会連合 6時／新宿駅前集会

▽6・19 全都学生自治会連合 6時／新宿駅前集会

大阪

▽6・13 全関西学生自治会連合 6時／梅田駅

▽6・21 全関西学生自治会連合 6時／梅田駅

兵庫

▽6・19 全関西学生自治会連合 5時／神戸三宮駅前

広島

▽6・19 全広島学生自治会連合 6時／新広島駅前集会

福岡

▽6・20 福岡市学生自治会連合 6時／天神西鉄ホール

山口

▽6・18 山口地区学生自治会連合 6時／山口市学生会館／山口地区駅、山口大会議

岡山

▽6・17 反戦学生自治会連合 6時／ビッグジョイ／倉敷駅

京都

▽6・19 全京都学生自治会連合 6時／市役所まえ

鳥取

▽6・20 鳥取地区学生自治会連合 5時／米子市／西部地区駅前

長野

▽6・21 長野県学生自治会連合 20日夜 長野公園

高松生

全高松学生自治会連合 20日夜 高松公園

名古屋

▽6・21 全愛知学生自治会連合 6時／八熊公園

東海

▽6・19 全東海学生自治会連合 6時／徳川中央公園／栄

弾圧にたいする心得

夏期一時金3割カンパを訴える

革命的共産主義者同盟

最前線

マルクス主義青年労働者同盟中央機関誌

発売中！

36号 70／5

400円（〒75）

総特集

闘争記録 十一月決戦を闘って

1 公労協における闘い―国労など

2 京浜民間大企業の十一月決戦

3 東芝府中と日電府中での闘い

4 〝ドヤ街〟からも立上る反戦派

5 九名の被告守る慈恵医大闘争

6 反戦教師の闘い―広島・横浜

7 三菱広機の闘い

8 西の拠点・長崎

9 勾留理由開示裁判

学習欄

◆労働運動講座 賃金と賃金闘争 岸本健一

◆革命運動講座 共産党再建と3・15事件 田川和夫

◆マルクス主義講座 スターリン主義とは何か 山村克